

大学生におけるアイデンティティの確立と時間的展望

TAT 物語にみられる時間的統合の観点から

佐藤裕樹*・岡本祐子*

Construction of Identity and Time Perspective for College Students

Yuki Sato and Yuko Okamoto

Past studies dealing with the effects of time perspective on identity construction have lacked a time integration point of view. This paper presents the effects from the perspective of college students and arrives at the following conclusions. (1) Achievement and diffusion status have intermixed both high and low time integration groups. (2) However, foreclosure status has a relatively high integration, whereas moratorium status has a low integration. The above conclusions suggest that for foreclosure and moratorium status, time integration is more important as compared to achievement and diffusion status. On the other hand, some problems are indicated on the scale with respect to categorizing four identity statuses. Finally, the paper discusses several suggestions for future studies.

Keywords: identity construction, time perspective, time integration, TAT.

問 題

1. アイデンティティ研究

1950年代にEriksonが提唱して以来、アイデンティティに関する研究は年々増えている(鎌・岡本・宮下, 2002)。大野(1995)によれば、アイデンティティとは「内的な不変性(sameness)と連続性(continuity)を維持する各個人の能力(心理学的意味での自我)が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験から生まれた自信」である。つまり「自分とは何か」「自分の人生の目的は何か」「自分の存在意義は何か」などの疑念に答えを見出していく過程であり、このようなことは青年期において中心的な課題であるとされる(宮下, 1999)。このような自己の探求は多くの人々にとって人生を通した主要なテーマであり、現在では生涯発達の見点からも研究されている(岡本, 2002)。しかし研究者の間では、アイデンティティの確立は大学時代になされるという認識が一般的である(Barbara & Philip, 1984)。このようなことから、全ての年代を通しても青年期におけるアイデンティティの確立の問題はとりわけ重要である。

白井(2008)によれば、アイデンティティにおける自己の不変性と連続性とは、時間が過去から未来へと一貫し

* 広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

て流れる感覚である。こうした感覚が不安定な状態になることで、アイデンティティが拡散するのだと考えられる。実際、小此木(1974)はアイデンティティ拡散症状の1つに時間的展望(time perspective)の拡散を挙げており、これは時間を経ていく感覚がきわめて不安定な状態をさしており、時間的展望の獲得がアイデンティティの確立において重要な要素となっていることを示している。

2. 時間的展望研究

時間的展望とは、最も一般的には「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」(Lewin, 1951)と定義され、個人が心理学的な過去・現在・未来をどのように位置づけているのか、そしてそれらをいかに関連づけ、意味づけてとらえているかを示す概念であるとされる(都筑, 1984)。

小此木も含め、これまでも時間的展望の概念とアイデンティティとの関連は指摘されてきた。例えば都筑(1993)は国内外におけるこれまでの研究を概観し、時間的展望とアイデンティティの達成度との関連が示唆されていると述べている。一方で、アイデンティティが確立される途上にある状態をモラトリウムと呼ぶが、小此木(1998)は現代社会において自立しないことの方が、むしろより適応的であるような青年期のモラトリウム心理を指摘しており、その1つの要因として青年期延長(extension of adolescence; 高木, 1999)という現象が挙げられる。青年期延長とは発達加速現象や晩婚化などの要因により青年期が長期化している現象を意味し、その心理的な要因として時間的展望の拡散が関連していると考えられる。

現代社会におけるこのようなアイデンティティの心性を理解するためには、「過去・現在・未来」に対する時間意識を個々に概観するような視点だけではなく、そのそれぞれの時間意識の繋がりを統合して分析する視点が必要である。しかしながら、従来の研究では「過去・現在・未来」を総合的にみる、時間的統合(time integration; 時間的連関性, time relatedness)の視点からの検討が少ないことが指摘されている(都筑, 1993)。時間的統合とは、過去・現在・未来というそれぞれの時間に対する意識の連関を意味するものであり、このような視点から青年期を捉えることは、現代社会のモラトリウム心理における時間意識の繋がりをみていく上で不可欠である。そのため本研究では、時間的統合を「過去・現在・未来というそれぞれの時間に対する意識の連関」と定義し、時間的統合の観点から時間的展望を捉え、アイデンティティとの関連を検討していくこととする。

3. 時間的統合の測定方法—TAT(主題統覚検査)の可能性

個人の時間的統合を測定する場合、それがはっきり自覚されたものというよりは、はっきり意識されないような、ぼんやりとしたイメージとして体験されると考えられ、こうした前意識的状态から意識化への過程を測定するものとしては、自我のより無意識的な部分を測定する投射的手法が適当であると思われる。一方で、時間的統合が「過去・現在・未来」の繋がりを意味することを考えると、それは過去や未来を物語る過程の内に示されると考えられる。個人に物語を作成してもらう投射的手法はいくつかあるが(e.g. 文章完成法, 主題統覚検査)、より無意識的な部分へのアプローチが可能であること、さらに物語の能動的な想像が可能であることを考慮し、本研究では主題統覚検査(TAT)を用いることとする。

TATとは、ある葛藤場面が描かれた図版を見せ、その場面に至るまでにどのようなことがあったのか、その場面では何が起きているのか、そしてこれから先どうなっていくのか、という過去・現在・未来を包含した物語を作成してもらう投射的手法である。TATの図版には調査協力者の自己が投射されるとされており、過去から未来へと物語る過程のなかに、上述したような時間の体制化、つまり時間の統合的側面が現れることが想定される。

ところで、Epley & Ricks(1963)はTAT物語に示される過去から未来までの時間的長さである包摂時間(time span)

に着目し、未来展望(foresight)と過去展望(hindsight)を測定する分析法(10-point scoring system)を提案している。彼らはこの分析法を用い、長期的な未来展望(long future time spans)をもつ人は、Erikson の発達段階における親密性対 孤立の葛藤をうまく処理していることを見出している。また、長期的な未来展望が男性に多く見られることが他の研究により指摘されている(Wholford, 1968; Squyres, Craddick, Callawey, & Kempler, 1982)。

このような物語の包摂時間については、過去展望および未来展望が人格の中核的な性質を示しているとされており(Ricks, Umbarger, & Mack, 1964; Squyres et al., 1982), TAT 物語に示される時間的特徴とは、その人が持つ独自の時間に対するイメージであると言える。しかし、上述のように時間的展望研究において TAT を用いた研究はいくつかあるが、物語が含む過去から未来までの時間的長さである、包摂時間(time span)のみを変数としているものが多い(e. g., Epley & Ricks, 1963; Teahan, 1958; Wohlford, 1968; Wohlford & Herrera, 1970)。個人の時間的統合という側面を考えたときにより重要となるのは、物語の主人公が如何なる現実性をもって語られたのかである。つまり、物語の現実場面で主人公が欲求を充足するために実際的な行動を起こしたのか、それとも欲求を空想し思い描くだけであるのか、という物語における現実性の水準(level)が問題となってくる。そのため、これまでの研究では物語の包摂時間のみを分析の対象としていたが、本研究ではこの現実性水準について検討していくこととする。

物語の現実性水準とは、現実的—非現実的という次元における物語の現在の行動および圧力が、(a)現実行動、(b)前行動、(c)空想のどの段階にあるのかを意味する。Tomkins が考案したこのような分析法を水準分析といい、戸川(1953, 1959)は Tomkins の水準分析を参考に独自の形式分析を提案している。本研究では個人の時間的統合が、「現在の欲求—行動の現実性」および「現在の圧力の現実性」に表されると仮定し、戸川の形式分析を参考に、時間的統合の程度が青年のアイデンティティとどのように関連しているのかを考察する。

4. アイデンティティの測定方法

アイデンティティの地位達成水準を測定する方法として、Marcia は Erikson の漸成発達論を発展させ、実証的に研究する理論と手段を考案している。Marcia が提唱するアイデンティティ・ステータス論では、青年期におけるアイデンティティ課題への対処様式によりアイデンティティが4つのタイプに分類され、操作的定義として「危機の有無」と特定の職業やイデオロギーへの「積極的関与(または自己投入)の有無」の2要因が用いられている。加藤(1983)は Marcia の理論に着目し、一般的な自我同一性地位を測定する尺度を開発している。ここで、本研究では“identity status”という用語に対して「アイデンティティ・ステータス」という訳語を充てるが、加藤(1983)は同用語に対して「自我同一性地位」という訳語を充てているため、加藤(1983)の研究および尺度について言及する場合には、そのまま「自我同一性地位」の訳語を用いる。

加藤(1983)の同一性地位判定尺度を用いた先行研究より、以下のことが見出されている。同一性達成地位は自分自身の過去・現在・未来をより統合した形でとらえながら、同時に未来志向的でもあること(都筑, 1993, 1994; 渡邊・赤嶺, 1996)、権威受容地位は同一性達成地位と同様の傾向を示すこと(都筑, 1993)、モラトリアム地位は未来志向的ではあるが、アイデンティティ達成型よりも時間的統合度が低いこと(都筑, 1993)、そして同一性拡散地位は他の地位よりも、過去・現在・未来のすべてについてネガティブにイメージしていること(都筑, 1993, 1994; 渡邊・赤嶺, 1996)である。以上のことから、同一性達成地位である者は最も時間的統合がなされ、未来をポジティブに捉えており、同一性拡散地位である者は時間的統合度が他の地位よりも低く、未来をネガティブに捉えていることが分かる。

本研究は主として、時間的統合とアイデンティティに関する代表的研究である都筑(1993)の研究手法をもとにしていくが、都筑が時間的統合の操作的定義として用いているのはCottle(1967)の開発したサークル・テストに示される時間的関連性である。サークル・テストとは「過去・現在・未来」のそれぞれについて円にたとえて用紙に記入してもらい、円の大きさや、円がどのように重なり合っているのかを分析していくものであり、サークル・テストでいう時間的統合とは、「過去・現在・未来」それぞれの円が部分的あるいは全く重なっている状態をさす(白井, 1989)。しかしながら、その個人にとって描画された円がどのような意味合いを持つのかについて、サークル・テストで問われることはない。これまでは時間的統合を測定する方法として、投映法的一种であるサークル・テストが主に用いられてきたが、都筑(1982)や奥田(2002)は時間的展望研究における課題について包括的に検討する中で、個人の時間的展望内での意味付けや内容が研究されてこなかった点について言及しており、時間的統合についても、その意味を考慮する必要があるだろう。

5. 目的

これまでの研究では、アイデンティティの在り方の違いによって「過去・現在・未来」に対する時間意識がどのように異なるのかということが主に注目されてきた。しかしながら、それらの時間意識がどのような繋がりをもって捉えられているのか、という時間的統合の視点から検討していくことが求められる。つまり、その個人がこれまで行ってきたことを現在の自分の行動に関連付け、現実的な未来を思い描いているのか、それともこれまでの自分は現在の自分とは関係がないものとして捉えられており、空想的な未来を思い描いているだけなのか、ということをはっきりと示していく視点の必要性である。このような視点から検討することによって、現代の青年に特徴的とされるアイデンティティの様態が、より有機的に描けるのではないかと考えられる。そこで本研究では、TAT に示される時間的統合を捉え、それが青年のアイデンティティの様態とどのように関連しているのかを考察することとする。

6. 仮説

時間的展望とアイデンティティとの関連性を検討した先行研究の結果を踏まえ、次の4つの仮説を立てる。(1)同一性達成地位にある者は、時間的統合が最もなされており、物語の結末は成功が多く、印象はポジティブである。(2)同一性拡散地位にある者は、時間的統合が他の地位よりもなされておらず、物語の結末は失敗が多く、印象はネガティブである。(3)モラトリアム地位にある者は、時間的統合が中程度になされている。(4)権威受容地位にある者は、同一性達成地位と同様の傾向を示す。

方 法

調査対象者 広島県内の大学生 129 名(男性 66 名, 女性 59 名, 不明 4 名; 平均年齢 20.86 ± 1.67 歳)を対象に質問紙調査を行った(無効回答数 1)。このうち TAT の個別実施に協力を得られたのは 39 名(男性 15 名, 女性 24 名; 平均年齢 20.79 ± 1.68 歳)であった。

調査時期 2009 年 10-11 月

手続き 大学の講義にて集団に質問紙を配布した。教示後、質問紙に記入を求めその場で回収した。同集団に対して TAT 実施の参加を募り、了承を得られた者に対して個別に TAT を実施した。

調査内容 アイデンティティ地位判定尺度(加藤, 1983): 下位尺度は「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入への希求」の 3 つであり各 4 項目(計 12 項目)で、「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」

までの6件法。下位尺度ごとの合計得点の如何によって、以下の6つのアイデンティティ地位が導かれる。(1)同一性達成地位(Identity Achievement Status)：過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者、(2)アイデンティティ達成—権威受容中間地位(A—F Middle Status)：中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者、(3)権威受容地位(Foreclosure Status)：過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者、(4)モラトリアム地位(Moratorium Status)：現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者、(5)アイデンティティ拡散—モラトリアム地位(D—M Middle Status)：現在の自己投入の水準が中程度以下の者のうちで、その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くないが、将来の自己投入への希求の水準がモラトリアム地位ほどには高くない者。(6)同一性拡散地位(Identity Diffusion Status)：現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入への希求も弱い者の6つである。

TAT 実施内容 TAT の個別実施の協力が得られた者に対し、時間的展望の統合の程度を測定する方法としてTATを実施した。検査時に用いたTAT図版は図版1, 3GF, 8GF, 13B, 13G, 20である。使用図版はそれぞれ、個としてのアイデンティティの確立という点と、物語の過去から未来までの時間的な流れの描かれやすさという点を考慮して選定された。教示については戸川(1953)を参考に作成した。実施中の質疑については、過去または未来についての言及が無い場合に、次のような質疑を行った。「これ以前にどのようなことがあったでしょうか」「これから先、どのようなことがあるでしょうか」。

TAT 物語の分析方法 (1)主人公の選定：物語の中心的人物(主人公)についての欲求・圧力を分析していくため、Steinによる主人公の選定条件(戸川, 1953)を参考にし、次のような特徴を備える人物を主人公とした。「語り手がそれから物語を開始した人物」「物語の全体を通じて語り手の注意の中心となっている人物」「重要な行動の主動的位置にある人物」「物語の中心となっている人物」「他の人物がみんなその人に働きかけているところの人物」「年齢、性別、その他の諸点において語り手にもっとも近い人物」。(2)水準分析：戸川(1953)が提案する分析法であり、これを参考にマニュアルを作成した。この分析法では、物語の主人公に示される欲求と圧力がどの程度の現実性で述べられているかが、大まかに「現実水準」「前行動水準」「空想水準」の3段階に分類される。本研究ではこれらの水準を「現実水準—非現実水準」の軸上に示されるものと考え、5段階の評定を行った。それぞれ1点から5点の得点を与え、得点が高いほど非現実性の水準にあることを意味する。これを物語に示される欲求および圧力について評定した。Table 1に欲求および圧力の各水準についての例文を示す。

Table 1 欲求および圧力の各水準についての例文(戸川, 1953 より)

水準	欲求の例	圧力の例
1	彼は女を殺した。	彼は先生に叱られた。
2	彼は女を殺す計画をした。	彼はまた先生にしかられやしないかと考えた。
3	彼は女を殺してしまいたいと考えた。	彼は万が一にも先生に叱られてもしたら大変だと心配した。
4	彼は女を殺すことができたらよいと考えた。	彼は自分が先生に叱られた場合を空想した。
5	彼は女を殺した夢をみた。	彼は先生に叱られた夢を見た。

結 果

1. アイデンティティの様態

質問紙調査で得られたデータをもとに、加藤(1983)の分類基準により6つの自我同一性地位に分類した。欠損値があった2名については分析から除外し、調査対象者全体およびTAT実施群における同一性地位の出現頻度を求めたところTable 2のようになった。Table 2より、調査対象者全体ではDM中間が男女ともに過半数を占め、次いで約20%が自我同一性拡散地位となったこと、権威受容地位が最も少なく1名のみで、他の地位は同程度の割合であったことが分かる。またTAT実施群では、DM中間地位が過半数を占めていること、次いで同一性拡散地位の割合が高いことは全体と同様の傾向が示されている。

ここで、本研究の目的は自我同一性地位の種類とTAT物語において得られたデータとの関連性を検討することであるが、権威受容地位がTAT実施群において0名であること、DM中間地位の割合が大きすぎることで、男性においては同一性達成地位が0名であることなど、このまま同一性地位の分類をその後の分析に用いることは不適當であると思われた。そのため本研究では、先行研究ではあまり検討されていないもの、尺度得点による同一性地位の分類を試みた。再分類を行うために、まず下位尺度の信頼性係数を算出したところ、「現在の自己投入($\alpha = .79$)」以外の2因子は $\alpha < .40$ と信頼性が著しく乏しいことが分かった。そのため確認的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、加藤(1983)と同様に3因子構造に分かれるかを検討した(Table 3)。

因子分析の結果、因子負荷量が.40未満であった4項目が削除され、「現在の自己投入(F1)」「過去の危機(F2)」「将来の自己投入への希求(F3)」が抽出された。過去の危機は本来の質問項目から2項目、将来の自己投入への希求においても同様に2項目が削除された。因子間相関については「現在の自己投入」と「将来の自己投入への希求」との間で中程度の相関がみられていたが、それ以外の因子間では概ね独立した関係性にあることが分かった。それぞれの因子得点について性差を検討したところ、3因子ともに性差は認められなかった($F1: t(123) = .802, n.s.$; $F2: t(123) = -.858, n.s.$; $t(123) = .259, n.s.$)。

Table 2 アイデンティティ地位の度数分布

地位分類	調査対象者全体			TAT実施群		
	度数(%)	男性	女性	度数(%)	男性	女性
同一性達成	6(4.8%)	2	4	2(5.1%)	0	2
AF中間	9(7.1%)	6	3	4(10.3%)	3	1
権威受容	1(0.8%)	1	0	0(0.0%)	0	0
モラトリアム	9(7.1%)	5	4	2(5.1%)	1	1
DM中間	74(58.7%)	40	34	25(64.1%)	10	15
同一性拡散	27(21.4%)	12	15	6(15.4%)	1	5
合計	126	66	60	39	15	24

AF中間：同一性達成(A)―権威受容(F)中間地位

DM中間：同一性拡散(D)―モラトリアム(M)中間地位

Table 3 自我同一性地位判定尺度の因子分析結果

質問項目	F1($\alpha=.79$)	F2($\alpha=.61$)	F3($\alpha=.51$)
1 私は今、自分の目標をなすとげるために努力している	.772	.147	-.161
2 私には、特にうちこむものはない*	.631	-.191	.141
3 私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている	.801	.031	-.087
4 私は『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない*	.696	-.135	.053
5 私は以前、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ真剣に迷い考えたことがある	.057	.831	.102
6 私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある	-.167	.626	-.180
7 私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている	.164	.350	.416
8 私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない*	-.099	-.093	.823
因子間相関	F1	.242	.440
	F2		.070

* 逆転項目

加藤(1983)の同一性地位判定尺度はアイデンティティを分類する方法として広汎に用いられているが、確認的因子分析を試みた研究は少なく、野村・橋本(2006)が試みているのみである。野村らは従来の3因子構造を見出しはいるが、低い因子負荷量を示すいくつかの項目を削除しており、さらに信頼性係数が.70未満の因子が抽出されていることから、本研究の結果との類似性が指摘できる。しかし野村らは加藤(1983)の理論的仮定を尊重し、信頼性が低かった因子もそのまま用いることでアイデンティティの分類を試みている。本研究も野村らに倣い、因子をそのまま用いることでアイデンティティを分類していくこととした。

アイデンティティの再分類について、野村・橋本(2006)は因子の中央値を判定に用いており、本研究でも同様に、因子ごとの中央値を用いてアイデンティティ地位分類を試みた(Figure1)。分類した群ごとの度数分布についてはTable 4に示す。調査対象者全体における人数比の性差は有意ではなかった($\chi^2(3)=.455, n.s.$)。

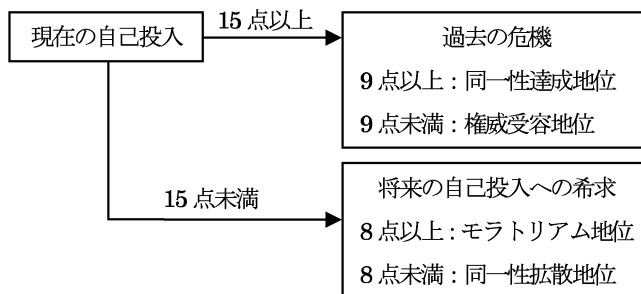


Figure 1 中央値を用いたアイデンティティ地位分類 (野村・橋本, 2001 を参考に作成)

Table 4 アイデンティティ地位再分類後の度数分布

	調査対象者全体			TAT 実施群		
	度数(%)	男性	女性	度数(%)	男性	女性
同一性達成	43(33.6%)	22	21	17(43.6%)	5	12
権威受容	25(19.5%)	15	8	9(23.1%)	6	3
モラトリアム	29(22.7%)	16	13	7(17.9%)	3	4
同一性拡散	31(24.2%)	13	17	6(15.4%)	1	5
合計	128	66	59	39	15	24

2. TAT 物語の分析

TAT の実施によって得られた物語データは逐語録を作成し、水準分析法に従いスコアリングした。合計 234 物語(39 名×図版 6 枚)のうち、約 1/3 にあたる 90 物語(各図版 15 名分)を対象とし、スコアリングした現実性水準の値について研究協力者(心理学専攻の大学生)との評定一致率を求めた(Table 5)。その結果、図版 1, 13B, 20 以外は 80 と高い一致率を得た。評定が食い違う部分についてはもう 1 人の評定者と協議し、評定値を合わせた。残りの物語については筆者が評定を行った。尚、図版 20 は 1 名のみ評定不能であったため分析から除外した。

欲求水準と圧力水準、および両水準を合計した数値の平均について、TAT 実施群全体と性別ごとに平均と標準偏差を求め、性差を検討した(Table 6)。その結果、男女で水準値に有意差は認められなかった。

次に各水準値および全水準値の相関関係について Spearman の相関分析を行った(Table 7)。結果より、全ての相関係数について有意であった。欲求水準と圧力水準の相関係数については $r = .583$ と中程度の正の相関が認められており、全水準値とは 80 以上の高い正の相関が得られたため、両水準がほぼ同一の時間的統合の程度を示しているとし、全水準平均を後の分析で用いることとした。

個人内におけるそれぞれの図版ごとの水準値を検討するため、反覆測定による一元配置分散分析を行ったところ、欲求水準で各図版間に有意な差が認められた($F(5) = 2.96, p < .05$; $F(5) = 3.01, p < .05$)。下位検定(Bonferroni 法)を行った結果、欲求水準において図版 1 が図版 13G よりも有意に水準が高かった($p < .05$)。

Table 5 TAT 物語の図版ごとの評定一致率

図版	1	3GF	8GF	13B	13G	20
一致率	.60	.80	.87	.60	.87	.60

Table 6 欲求および圧力の平均水準(SD)と水準合計点(SD)

	全体	男性	女性	U 値
欲求水準	1.49 (±0.37)	1.59 (±0.35)	1.43 (±0.38)	123.0 (<i>n.s.</i>)
圧力水準	1.56 (±0.47)	1.68 (±0.46)	1.49 (±0.47)	135.0 (<i>n.s.</i>)
全水準	1.52 (±0.35)	1.63 (±0.35)	1.46 (±0.33)	132.5 (<i>n.s.</i>)

Table 7 現実性水準の相関分析

	圧力水準	全水準値
欲求水準	.583**	.869**
圧力水準		.889**

**: $p < .01$

本研究の仮説を検討するために、全水準平均の中央値(17.0)をカットオフポイント(17.0/18.0)として、現実性水準の低群/高群に分けた。本研究では現実性水準の値が高いほど時間的統合がなされておらず、水準値が低いほど時間的統合がなされていると見なすため、それぞれ現実性水準の低群/高群が時間的統合の高群/低群にそれぞれ対応すると見なす。

両群についてアイデンティティ地位分類ごとの人数比を求めたところ、Table 8 のようになった。結果からは、権威受容とモラトリアムの人数比に偏りが窺えるが、4×2 のクロス集計であること、結果が有意傾向($p < .10$)であることから、解釈には注意を要する。

現実性水準の影響をより明確にあらわすため、低群/高群ごとに同一性達成地位と権威受容地位、モラトリアム地位と同一性拡散地位の度数を合計し、「現実性水準の低群/高群」と「現在自己投入の低群/高群」の Fisher の正確確率検定を行った(Table 9)。結果より、低群と高群の間で人数比に有意差が認められた($p < .05$)。時間的統合が比較的なされているとみなされる低群では、現在の自己投入をしている者の割合が同数であり、アイデンティティの確立との関連は認められていない。しかしながら、時間的統合が比較的なされていないとみなされる高群においては、現在の自己投入/自己不投入の両群間で偏りが見られており、現在の自己投入がなされている者の割合の方が大きかった。

Table 8 アイデンティティ×現実性水準のクロス集計 (4×2)

	同一性達成	権威受容	モラトリアム	同一性拡散	合計
現実性水準低群	8	2	6	4	20
現実性水準高群	9	7	1	2	19
合計	17	9	7	6	39

Fisher's exact test: $p < .10$

Table 9 現在の自己投入×現実性水準のクロス集計 (2×2)

	現在の自己投入高群	現在の自己投入低群	合計
現実性水準低群	10	10	20
現実性水準高群	16	3	19
合計	26	13	39

Fisher's exact test: $p < .05$

考 察

1. アイデンティティの様態

本研究で対象となった集団については、先行研究(e.g., 都筑, 1993)と同様に、アイデンティティの様態について性差は認められなかった。再分類後のアイデンティティ地位については中央値を基準に分類したために、分布がほぼ均等になった。この分類法を用いることで、これまで指摘されていた分布の偏り(e.g., 渡邊・赤嶺, 都筑, 1993)については解消できると言える。しかし標本集団内の相対的な分類であるため、研究間の比較をする場合には注意を要すると思われる。また同一性地位判定尺度自体について、質問項目に若干の問題が認められたこともあり、カットオフポイントをいくつに定めるのかについては、今後検討していく必要があるだろう。尺度の問題については後述していく。

2. アイデンティティと時間的統合との関連

TAT 物語に示される欲求水準および圧力水準の程度を時間的統合の指標として分析した結果、それぞれの水準について大きな差は認められず、両水準全体の平均が時間的統合の指標として妥当であると判断した。しかしながら、従来の時間的統合の指標とされてきたサークル・テストとの関連については検討されていない。TAT に示される物語の現実性水準を時間的統合の指標として用いることの妥当性や今後の可能性については後述したい。本研究では当初仮定したように、現実性水準を時間的統合の程度を示すものとして捉えていく。

アイデンティティ地位分類と時間的統合との関連性について検討した結果(Table 9)より、今現在、何かに打ち込んでいる者の方が、つまりアイデンティティが確立している者の方が、時間的統合がなされていないことが読み取れる。これは都筑(1993)で認められた結果と矛盾する結果である。

しかしながら、有意傾向($p < .10$)ではあるが、Table 8 の人数比を見ても、同一性達成地位では低群/高群に人数のバラつきは見られないものの、権威受容地位においては現実性水準の低群に2名、高群に7名とややバラつきのある結果となっている。そのため、Table 9 での有意差は、権威受容地位の人数のバラつきによって引き起こされたと考えられる。また同一性拡散地位の人数比も比較的バラつきは認められないが、モラトリアム地位においては現実性水準の低群6名、高群1名とややバラつきのある分布となっており、同様に Table 9 の結果に影響を与えたと考えられる。

権威受容地位を特徴づけているのは過去の危機の得点が低いことである。村瀬(1995)は Offer & Offer の研究を引き合いに適応的な青年像を考察しており、権威受容地位の特徴について順応的前進的に青年期を過ごしていることを指摘している。この柔軟性のある自己の在り方が、TAT 物語において主人公が欲求や圧力を現実的な水準で示さないことに関連しているのではないだろうか。たとえば、自身の欲求を貫き通すことは外的な環境との摩擦を生むものであると考えられるし、そうした外的な圧力を現実的な障害と認識するほど、困難を感じやすくなると考えられる。権威受容地位においては、そうした欲求を行動レベルで語らないことによって外的環境との摩擦を避け、また外的な圧力自体も自身にとっては関係のないようなものとして捉えることによって、やや回避的に順応性のあるアイデンティティを確立しているのではないかと考えられる。時間的統合の文脈から意味づければ、つまり現在ある欲求が、過去や未来と分断されることによって、何かに繋がらばよいといった方向性のないものになると考えられる。欲求が過去から現在、現在から未来へと繋がっていないため、どのようなことが圧力となり得るのかについて同定しえないのではないだろうか。

他方のモラトリアム地位は、将来の自己投入への希求の得点が高いことで特徴づけられる。モラトリアム地位における現在の自己投入は同一性拡散地位と同じく低いものの、将来に対しては自己投入することを比較的強く希求しており、そうした期待感が反映された結果、TAT 物語上では欲求や圧力が現実的な水準で語られるようになったのではないかと考えられる。つまり夢想的に、現在の自己投入がなされている主人公が作り出されたものと考えられる。時間的統合の文脈から考えると、こうしたアイデンティティを確立しようと将来に向かう時にこそ、時間的統合というものは強く要求されるのではないだろうか。

権威受容地位とモラトリアム地位におけるそれぞれの特徴をまとめると、前者では時間的統合を弛緩させることによって順応的なアイデンティティを得ていると考えられるし、後者では時間的統合を強固にすることで自分にはどんなアイデンティティがあるのかと模索できていると考えられる。しかしむしろ、順応的あるいは模索的なアイデンティティの在り方が、今現在の自己にとって必要となっているのではないだろうか。つまり時間的統合とは、アイデンティティの様態がそうした「順応すること」あるいは「模索すること」のニーズが高まった場合に、特徴的に機能するのではないかと思われる。しかし本研究の結果からは、上記の考察を裏付ける統計的な実証性が得られたとは言いにくい。今後、その時点でのその人のアイデンティティの様態や、意識的/無意識的に必要される自己を考慮した上で、時間的統合の機能を詳しく検討していく必要があるだろう。

3. 同一性地位判定尺度の問題

これまで多くの研究で同一性地位判定尺度が用いられてきたが、前述したように、その問題点についていくつかの指摘がなされている。1つは渡邊・赤嶺(1996)が指摘するようなアイデンティティ地位の人数の偏りであり、もう1つ重要な問題点としては尺度の信頼性の問題が指摘できる。後者について指摘する研究は少ないが、野村・橋本(2006)はこうした尺度構成に対する問題点を指摘しており、本研究でも同様の問題が見受けられた。本研究では現在の自己投入(4項目; $\alpha=.79$)、過去の危機(2項目, $\alpha=.61$)、将来の自己投入への希求(2項目, $\alpha=.51$)という結果であり、野村・橋本(2006)も同様の因子構造、つまり現在の自己投入(4項目; $\alpha=.79$)、過去の危機(3項目, $\alpha=.49$)、将来の自己投入への希求(2項目, $\alpha=.61$)の3因子を見出している。本研究との比較をすると、現在の自己投入に関しては安定した因子構造が両研究間で認められているものの、過去の危機と将来の自己投入への希求の2因子は信頼性が低く($\alpha<.70$)、質問項目の再検討の必要性が示唆された。今後、同尺度を用いてアイデンティティ地位分類を試みる際には、導入を慎重に検討する必要があるだろう。しかし過去・現在・未来に対する自己投入の程度によってアイデンティティ地位を分類する同尺度の有用性は高いと考えられるため、アイデンティティ研究において同尺度の改訂が望まれる。

4. 今後の課題

TATを用いた時間的統合の測定については、間接的な測定という要素が大きいと考えられた。サークル・テストにしても、円の重なり具合によって時間的統合を分類しているに過ぎず、より直接的に時間的統合を測定できる尺度を開発することが必要だろう。しかしながら、TATで示される1つの物語から得られる時間的な特徴は多く、多様に示される時間的展望の諸側面を明らかにする分析手法を開発する可能性も残されている。

一方で、水準分析を用いてスコアリングしていく中で、多様な物語を量的な数値へ還元するには2次的な基準が必要であること明らかとなった。2次的な指標としては、たとえば「欲求および圧力の対象の明確性」が挙げられる。本研究で実施したTATでは、1つの物語に圧力がまったく見られないことがあり、そうした場合には水準4をスコアしたのである。こうした現実性水準のスコアは、むしろ時間的統合と密接に関連するものとして独

立に扱い、時間的特徴を直接的に示す部分（たとえば「結末の在り方」）を中心にした分析法を開発することもできるだろう。いずれにしろ、語りという質的データの特徴を数量化するための分析法を開発する際には、1 次的な基準をどのように設定するのかに加えて、2 次的な基準をどのように設定するかが重要となるだろう。TAT の可能性が示される中で、今後は上記の課題を解決し、時間的統合の内容的・形式的側面を明らかにしていくことが求められるだろう。

引用文献

- Barbara, M., & Philip, R. (1984). *Development through life—A psychosocial approach—Third edition.* (バーバラ, M. & フィリップ, R. 福富護 (訳) (1988). 新版 生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書店)
- Cottle, T. J. (1967). The サークル・テスト: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, **31**, 58-71.
- Epley, D., & Ricks, D. R. (1963). Foresight and hindsight in the TAT. *Journal of Projective Techniques*, **17**, 51-59.
- 加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 292-302.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1997). 青年心理学概論 誠信書房
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science: Selected theoretical papers.* New York: Harper & Brothers. (レヴィン, K. 猪股佐登留 (訳) (1974). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 宮下一博 (1999). アイデンティティ拡散 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 p. 5.
- 村瀬孝雄 (1995). 自己の臨床心理学2 アイデンティティ論考—青年期における自己確立を中心に 誠信書房
- 野村信威・橋本幸 (2006). 青年期における回想と自我同一性および心理的適応の関連 パーソナリティ研究, **15**(1), 20-32.
- 岡本祐子 (編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 小此木啓吾 (1974). 解説: モラトリアムとアイデンティティ拡散 小此木啓吾 (編) アイデンティティ 現代のエスプリ No.78 至文堂
- 小此木啓吾 (1998). モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 奥田雄一郎 (2002). 時間的展望研究における課題とその可能性—近年の実証的・理論的研究のレビューにむいて 中央大学大学院研究年報, **31**, 333-346.
- 大野久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見孝 (編) 講座 生涯発達心理学4: 自己への問い直し—青年期 金子書房, 89-124.
- Ricks, D., Umbarger, C., & Mack, R. (1964). A measure of increased temporal perspective in successfully treated adolescent delinquent boys. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **69**(6), 685-689.
- 白井利明 (1989). 現代青年の時間的展望の構造(1)—大学生と専門学校生を対象に 大阪教育大学紀要 第IV部門, **38**(1), 21-28.
- 白井利明 (2008). 自己と時間—時間はなぜ流れるのか 心理学評論, **51**(1), 64-75.
- Squires, E. M., Craddock, R. A., Burge-Callaway, K., & Kempler, B. (1982). Sex differences in time orientation: A Jungian

perspective. *Journal of Analytical Psychology*, **27**, 71-81.

高木秀明 (1999). 青年期延長 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣, p. 502.

鑪幹八郎・岡本祐子・宮下一博 (2002). アイデンティティ研究の展望VI ナカニシヤ出版

Teahan, J. E. (1958). Future time perspective, optimism and academic achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **57**, 379-380.

戸川行男 (1953). TAT 日本版：絵画統覚検査解説 金子書房

戸川行男 (1959). TAT 心理診断法双書 中山書店

都筑学 (1984). 青年の時間的展望の研究 大垣女子短期大学研究紀要, **19**, 57-65.

都筑学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.

都筑学 (1994). 自我同一性による時間的展望の差異—梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討 青年心理学研究, **6**, 12-18.

Wohlford, P. (1968). Extension of personal time in TAT and story completion stories. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, **32**, 267-280.

Wohlford, P. & Herrera, J.A. (1970). TAT stimulus-cues and extension of personal time. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, **34**(1), 31-37.

渡邊恵子・赤嶺淳子 (1996). 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望—学年差・性差の検討 人間研究, **32**, 22-35.